

## 5 歳児の家庭における絵本体験の特徴

－母親への質問紙調査から見る 3 年間の家庭での絵本とのかかわりの変化－

横山真貴子

(奈良教育大学 幼年教育教室)

上野由利子・長谷川かおり・木村公美・石田晶子・原田真智子

(奈良教育大学附属幼稚園)

5-year-old Children's Picture-book Experiences at Home.

Makiko YOKOYAMA

(Department of Early Childhood Education, Nara University of Education)

Yuriko UENO・Kaori HASEGAWA・Kumi KIMURA・Akiko ISHIDA・Machiko HARADA

(Kindergarten attached to Nara University of Education)

**要旨：**本研究の目的は、「絵本」を用いた保育実践の示唆をえるために、園児の家庭での絵本体験を明らかにすることである。そのため研究 1 では、5 歳児の母親 38 人を対象に質問紙調査を行い、「子どもの絵本好意度」「読み聞かせ頻度」「保育年数」「母親の読書活動」の 4 点から園児の家庭での絵本体験を分析した。研究 2 では、3 年保育児の母親 15 人に同様の質問紙調査を 3、4、5 歳時点で 3 回行い、絵本体験の変化を検討した。2 つの研究の主な結果は、以下の 3 点である。①縦断比較から、5 歳児では園での絵本体験の影響を受け「絵本好意度」が増加したと母親は捉えているが、「読み聞かせ頻度」は減少しており、子どもが自分で読む「ひとり読み」が増えていた。②「保育年数」の比較では、2 年保育よりも 3 年保育の母親の方が、絵本と子どもをつなぐかかわりが多くなっていた。③「母親の読書行動」は子どもの絵本体験と関連し、読書好きの母親の方がよりわが子が絵本好きだと捉え、子どももよく自分で本を読んでいた。これらの結果をもとに、幼稚園ならではの絵本実践のあり方について「幼小接続」「家庭との連携」「子育て支援」の 3 点から提案した。

**キーワード：**絵本 picture-books, 幼稚園 preschool, 5 歳児 5-year-old children, 質問紙 questionnaire technique

### 1. 問 題

平成 20 年 3 月、「学習指導要領」及び「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」の改訂が告示された。平成 21 年度以降の施行に向けて、学校教育・保育の新たな幕が開けたといえる。

「幼稚園教育要領」「学習指導要領」の改訂のポイントの 1 つは、「教育内容に関する主な改善事項」(中教審答申, 2008 年 1 月 17 日)として、その第 1 に「言語活動の充実」が挙げられている点である。言語の能力は、今回の改訂の基本方針の 1 つの柱である「思考力・判断力・表現力等の育成」に不可欠な力であり、子どもたちが「他者や社会とのかかわり」上でも必要な力である。そのため、国語科を中心に教科横断的に言語の能力を育成していこうというのが、今回の改訂である。

さらに答申では、言語活動を支える条件として、次の 3 点を挙げている。第 1 に教科書をはじめとする教材の充実、第 2 に読書活動の推進、第 3 に学校図書館の活用や学校における言語環境の整備である。

第 2 の「読書活動の推進」をめぐるのは、2000 年の「子ども読書年」以来、わが国の状況は大きく動いてきた。特に子どもが出会う初めての本である「絵本」は、出会いの時期も早まり、出会いの場も量も増加の一途を辿っている(秋田・黒木(編), 2006; 横山, 2006)。

幼児教育の場においても、絵本は言語、すなわち「言葉」を育てる重要な教材である。「いつでも、どこでも」子どもが絵本と出会うことができる現在、幼稚園ならではの絵本との出会いを明らかにしていく必要がある(横山・水野, 2008; 横山ほか, 2007)。そこで本研究では、幼児教育の場に求められる子どもと「絵本」のかかわりを考察し、「絵本」を生かした保

育実践のあり方について提案していく。

その際、今回の「幼稚園教育要領」の改訂でポイントとして挙げられる3つの方向性（中教審答申、2008年1月17日）から、幼児教育に求められる「絵本」のあり方について検討を加える。すなわち、第1に発達の学びや連続性を踏まえた幼稚園教育の充実（幼小接続）、第2に幼稚園での生活と家庭などでの生活の連続性を踏まえた幼稚園教育の充実（家庭との連携）、第3に子育て支援と預かり保育の充実である。

しかし、保育現場での絵本実践を検討する前に、まずは子どもが最初に絵本と出会う場である家庭での絵本体験の実態を明らかにしていく必要がある。先に挙げた「幼稚園教育要領」の改訂の第2のポイントである「家庭との連携」、及び第3のポイント「子育て支援」を検討するためにも必要である。そこで本研究では、園での絵本実践を検討するための第一歩として、園児の家庭での絵本とのかかわりを明らかにする。

次に研究方法は、家庭での絵本体験を規定する要因を模索するために、一度に多数の要因の情報を収集できる質問紙調査を用いる。その際、第2の観点「家庭との連携」を検討するために、質問紙の項目に、園の絵本体験との関連も加味する。また園での絵本体験、すなわち保育経験による比較が可能となるよう、3年保育と2年保育を実施している幼稚園を対象とする。さらに、就学を控えた5歳児を対象とすることによって、第1の観点「幼小接続」について検討する。

絵本体験を規定する要因としては、保育経験、すなわち「保育年数」に加え、先行研究から次の3点が考えられる。「子どもの絵本好意度」及び「読み聞かせ頻度」（横山、2006）、「読書モデル」としての「母親の読書活動」（秋田・無藤、1996）である。

本研究では、この4点から絵本体験を問う質問紙を作成し、3歳と4歳、及び就学直前の5歳児を対象に、同様の調査を縦断的に行い、入園直後から卒園までの家庭での絵本体験の変化を明らかにしていく。具体的には、研究1で5歳児の家庭での絵本体験の特徴をまとめ、研究2で3年間の発達的变化を捉える。その上で、幼稚園ならではの絵本実践のあり方について提案していく。

## 2. 研究1：5歳児の家庭での絵本体験の特徴

### 2.1. 目的

幼稚園ならではの絵本実践のあり方を探るために、園での絵本体験の影響を加味した質問紙調査を行い、5歳児の家庭での絵本体験の実態を明らかにする。

### 2.2. 方法

#### 2.2.1. 調査協力者と手続き

N県内の3年保育を実施しているN幼稚園5歳児2

クラス（各クラス29人、男児27人、女児31人）の母親58人。質問紙は、担任保育者に配布してもらい、園内に留め置き法で回収した。回収数は38（子どもの性別：男児20人、女児18人）、回収率は65.5%。母親の平均年齢は37.0歳（レンジ30～44、SD3.31）。調査時期は2006年3月中旬である。

#### 2.2.2. 質問紙の構成

5歳児の家庭での絵本体験を明らかにするために、以下の6点について尋ねた。

①読み聞かせ行動 読み聞かせの実施状況について、以下の5項目を尋ねた。(a) 読み聞かせ頻度（5件法：毎日～したことはある）、(b) 1日の実施時間（5件法：5分未満～1時間以上）、(c) 読み手（6択：複数選択可）、(d) きっかけ（4択）、(e) 時間帯（8択：複数選択可）。

②絵本 家庭で読む絵本に関して、以下の5項目について尋ねた。(a) 子どもの絵本好意度（5件法：とても好き～まったく好きではない）、(b) 絵本数（8件法）、(c) 絵本の種類（17択：複数選択可）、(d) 図書館の利用頻度（7件法）、(e) お気に入りの絵本（自由記述）。

③読み聞かせ中の反応 絵本を親子で読んでいる最中の行動を尋ねた。(a) 母親の読み方：13項目（5件法：とてもそうである～まったくそうではない）、(b) 子どもの反応：14項目（5件法）、(c) 子どもの絵本の楽しみ方（8択）。

④ひとり読み 絵本を読み聞かせてもらうだけではなく、子どもが自発的に1人で絵本を読む行動について2項目尋ねた。(a) 頻度（5件法：毎日～まったくない）、(b) 1日の実施時間（5件法：見ていない～1時間以上）。

⑤入園後の変化 幼稚園在園中の絵本体験の変化を母親はどのように認識しているのかを捉えるために、以下の3項目について問うた。(a) 好意度の変化（3件法：より好きになった、変わらない、以前ほど好きではなくなった）とその理由（自由記述）、(b) 一緒に絵本をみる頻度・時間（3択：増えた、変わらない、減った）、(c) お気に入りの絵本の変化（2択：変わった、変わらない）、変化の内容（自由記述）。

⑥母親の読書行動 子どもにとって家庭での読書（絵本を読む行為）のモデルは親である。そこで母親自身の読書行動について次の2項目を尋ねた。(a) 読書好意度（5件法）、(b) 読書頻度（5件法）。

#### 2.2.3. 分析

まず、5歳児の家庭での絵本体験の実態と特徴を描き出すため、全体的な分析を行い、考察を加えた。その後、5歳児の絵本体験がどのような要因によって規定されるのかを検討するために、子どもの絵本の好意度、読み聞かせ頻度、保育年数、母親の読書活動（読書好意度・読書頻度）の4点に関して、評定値による群分



けを行い、上記①～⑤の各項目を従属変数として、群差の検定を行った。

## 2. 3. 結果と考察

### 2. 3. 1. 全体的な結果

①読み聞かせ行動 (a) 頻度 (Figure 1): 「週に2, 3回」が13人 (34.2%) と最も多く、「週に1回」が12人 (31.6%) と続いた。その他、「毎日」「ほぼ毎日」の合計が7人 (18.5%)、「したことがある」が6人 (15.8%) だった。このことから、「読んだり読まなかったりする家庭」を中心に、「毎日読むことが定着している家庭」と「ほとんど読まない家庭」に3分されていることが分かる。

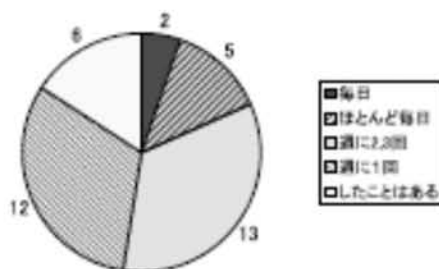


Figure 1 読み聞かせ頻度

注) グラフ中の数値は、人数を示す (以下、同様)。

(b) 1日の実施時間 (Figure 2): 「5～15分」が17人 (44.7%) と最も多く、「15～30分」が13人 (34.2%) と続いた (未記入者1人)。

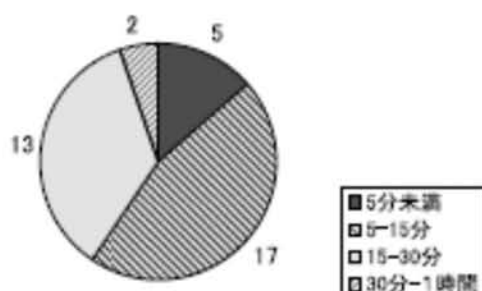


Figure 2 読み聞かせの実施時間

5～30分の間に全体の8割近くが含まれた。この時間量は1～3冊程度の絵本を読む時間である。「頻度」にはばらつきが見られたが、「時間」には見られなかったことから、一度絵本を手にとると、どの家庭でも同程度の冊数の絵本を読んでいると推察される。

(c) 読み手 (複数回答可) (Figure 3): 子どもに絵本を読む人は「母親」が最も多く、36人 (94.7%) だった。次いで「父親」が16人 (42.1%) だった。読み手の中から「1番よく読む人」も選んでもらったが、圧倒的に「母親」が多かった。

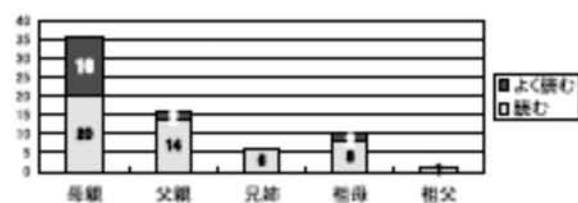


Figure 3 絵本の読み手

(d) 読み聞かせのきっかけ: 「子どもに頼まれて」が25人 (65.8%) と最も多く、次いで「いつも習慣となっている」が10人 (26.3%) だった。

(e) 読み聞かせの時間帯 (複数回答可): 「就寝前」が26人 (68.4%) と最も多く、「幼稚園から帰ってきて日中」が15人 (39.5%) と続いた。

以上の結果から、5歳児の家庭での読み聞かせ行動をまとめると、「毎日読んでいる家庭と、読んだり読まなかったりする家庭、読まない家庭」に3分され、絵本を読む場合は、子どもに頼まれたり、習慣になっている時間帯 (主に就寝前) に、母親が2, 3冊、読んでいる」といえる。

②絵本 (a) 子どもの絵本の好意度: 「とても好き」22人 (57.9%)、「好き」15人 (39.5%)、「好きでもない」1人 (2.6%) であった。全体的に好意度が高い。

(b) 絵本数 (Figure 4): 「31～50冊」が13人 (34.2%) と最も多く、「51～99冊」が11人 (28.9%) と続く。10冊以下の家庭はなく、全体の8割が31冊以上の絵本を所有している。

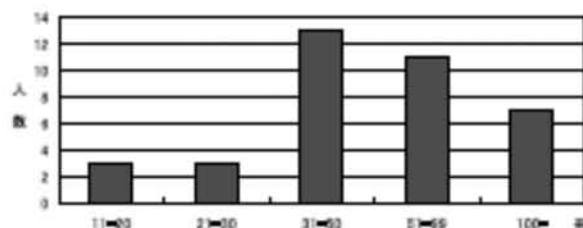


Figure 4 絵本数

(c) 読む絵本の種類 (複数回答可) (Figure 5): 16種類の絵本の内、最も多いのは「昔話やおとぎ話」で、30人 (78.9%) が挙げた。次いで、園で毎月購入している「ワンダー民話館」(世界文化社) が26人 (68.4%)、「クイズ絵本」が24人 (63.2%) だった。

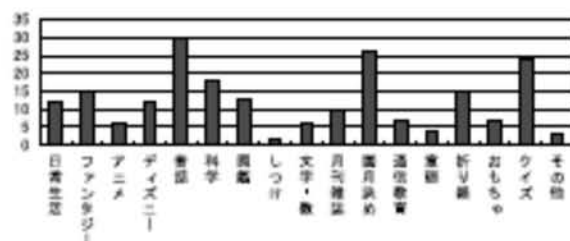


Figure 5 読む絵本の種類

(d) 図書館の利用頻度 (Figure 6): 「2、3ヶ月に1回」が最も多く15人 (39.5%)、「これまでに1度はある」が12人 (31.6%) と続いた。「1度はある」「全くない」と答えた人を併せると16人 (42.1%) となり、図書館の利用頻度は全体的に低いことが示された。

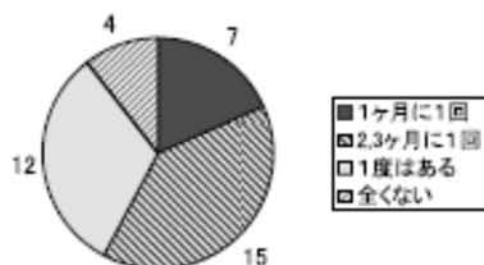


Figure 6 図書館の利用頻度

(e) お気に入りの絵本: 38人中「ある」と答えたのは36人 (94.7%)、具体的な記入があったのは35人 (92.1%) だった。のべ78種類の絵本 (シリーズも含む) が挙げられ、平均記入数は2.4冊 (SD1.39, レンジ1-5) だった。

最も多かったのは「バムとケロのシリーズ」(島田ゆか作・絵、文芸堂) で7人、次いでテレビアニメの絵本版「忍たま乱太郎シリーズ」(尼子騒兵衛ほか、ポプラ社) と「かいけつゾロリシリーズ」(原ゆたか、ポプラ社) が5人ずついた。絵の中から隠れているものを探すゲーム絵本「ミッケ! シリーズ」(ウォルター・ウィック、糸井重里、小学館) も4人いた。さらに、男児4人からは「きょうりゅう」「こんちゅう」などの図鑑が挙がっており、就学前のこの時期、物語絵本だけではなく、多様な種類の絵本が「お気に入りの絵本」として読まれていることが分かる。

また14人 (40.0%) が、シリーズ名を挙げていた。特定の1冊というのではなく、お気に入りの主人公 (登場人物) や作家を基盤に、シリーズや同一作家の絵本を読み進めていることが分かる。

③読み聞かせ中の反応 (a) 母親の読み方 (Table 1): 13項目中、評定値の平均が3 (「どちらかといえばそうである」) 以上の全体としてよく行われていると考えられる項目は、「絵本の言葉に忠実に読む」「いろいろ

な本を読む」「劇のようにして読む」「会話しながら読む」の4項目だった。絵本に書かれた言葉を大切にしながら、子どもに内容をわかりやすく伝えるために、母親が劇仕立てにしたり、子どもとやりとりしながら読んでいく様子が見える。

Table 1 母親の読み方

質問項目	平均	標準偏差
1 同じ本を何度も繰り返し読むようにしている	2.55	0.15
2 できるだけいろいろな本を読むようにしている	2.55	0.15
3 絵本の言葉に忠実に読むようにしている	3.65	0.16
4 子どもと絵本を通して会話しながら読むようにしている	3.16	0.15
5 字を教えながら読んでいる	1.74	0.12
6 本に出てくる物の名前を教えながら読んでいる	2.16	0.16
7 絵本の中に描かれている物について説明を加えている	2.56	0.16
8 読んでいる図や挿絵に内容について質問し、分かったかどうかを確認するようにしている	2.16	0.16
9 登場人物によって声を覚えて、劇のようにして読んでいる	3.47	0.19
10 絵が手取り、身振りをつけて読んでいる	2.03	0.15
11 子どもが読めるところは、子どもに読ませながらよんでいる	2.29	0.21
12 絵本の中の出来事と似た子どもの生活経験を思い出して話	2.56	0.19
13 子どもが読んで欲しいという図り、何冊でも何冊でも読む	2.66	0.15

(b) 子どもの反応 (Table 2): 平均3以上は「静かに黙って聞いている」「分からないことを質問する」「内容に関連したことを話す」「感想を言う」の4項目だった。子どもたちは、絵本を読んでもらうのを静かに聞きながらも、絵本の内容に沿って、質問したり感想を言ったり、関連することを話すなど、言語による活発な参加をしている様子が推察される。

Table 2 子どもの反応

質問項目	平均	標準偏差
1 絵が読める絵本の言葉を繰り返し読もうとする	2.29	0.15
2 絵本の中の絵を子どもが指さす	2.66	0.16
3 絵本の中の登場人物と同じ身振りをする	2.21	0.14
4 気が散ってあまり集中して聞いている	1.66	0.13
5 静かに黙って聞いている	3.65	0.17
6 本に書かれている内容やそれに関連したことを話したりする	3.24	0.13
7 分からないことを質問する	3.74	0.12
8 感想を言ったりする	3.05	0.19
9 絵の読んでいる話を先取りして、続きを言ったりする	2.26	0.18
10 聞いているうちに、寝てしまう	1.92	0.55
11 絵本を1冊読み終わるまで、集中が続かない	1.50	0.12
12 読み終わる前に、次のページをめくろうとする	1.66	0.11
13 同じページだけを何度も見たりする	1.47	0.10
14 同じ絵本を何度も読んでほしが	2.87	0.18

(c) 子どもの絵本の楽しみ方: 「話の筋の展開を楽しんでいるようだ」が19人 (50.0%) と過半数を占めた。次いで「言葉やせりふをおもしろがっているようだ」が8人 (21.1%) だった。就学前のこの時期、子どもは「絵」(2人、53%) よりも「言葉」に興味を持ち、さらに1つ1つの「言葉」ではなく、物語全体を捉えて絵本を楽しんでいることが分かる。

④ひとり読み (a) 頻度 (Figure 7): 「ほとんど毎日」が18人 (47.4%) と最も多く、「毎日」11人 (28.9%)、「週に2、3回」9人 (23.7%) と続いた。「週1回」以下の回答はなく、就学前の子どもたちは、家庭で自分で絵本を読むことが、ほぼ習慣となっていることが分かる。



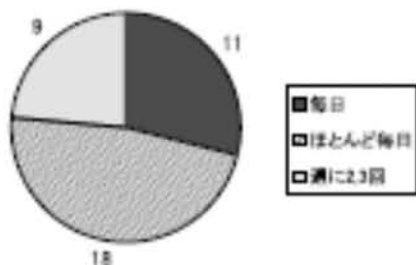


Figure 7 ひとり読みの頻度

(b) 時間 (Figure 8): 1日にひとりで絵本を読む時間は、「10-15分」が27人 (71.1%)と最も多かった。これは、絵本を2、3冊読む時間である。

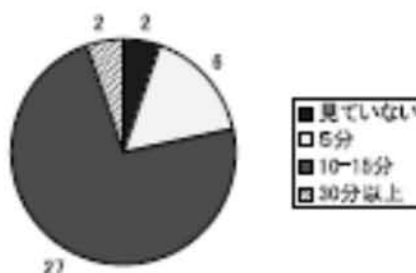


Figure 8 ひとり読みの時間

⑤入園後の変化 (a) 好意度の変化: 「より好きになった」が26人 (68.4%)と最も多く、「変わらない」10人 (26.3%)、「以前ほど好きではなくなった」2人 (5.3%)と続いた。好意度の変化理由 (自由記述) を見ると、「(園で) 定期的な絵本との出会いが増えたから」というように、園の影響 (「絵本の部屋」7人、「先生に読んでもらう」5人、「園の持ち帰り絵本」2人) を挙げる母親が多かった。

(b) 一緒に絵本をみる頻度・時間: 「減少」19人 (50.0%)が半数を占め、「増加」「変化なし」がそれぞれ9人 (23.7%)だった。

(c) お気に入りの絵本の変化: 「変わった」が26人 (68.4%)、「変わらない」が12人 (31.6%)だった。

変化の内容 (自由記述) は、「絵がたくさんかいてある見る絵本から、話しの長い内容のある本に」というように、「文字の多い物語絵本」への変化が半数の13人に見られた。さらに「<読んでもらう>から<自分で読む>」に変わって、絵本のみならず、読み物のものまで手をのばしているようです。」と子ども自らが本を読むようになったという記述も2人に見られた。

⑥母親の読書行動 (a) 好意度 (Figure 9): 「好き」「好きでも嫌いでもない」がともに13人 (34.2%)で最も多かった。次いで「とても好き」が8人 (21.1%)、「あまり好きではない」が4人 (10.5%)だった。「とても好き」と「好き」を併せると21人 (55.3%)とな

り、半数を占める。母親の読書好意度は、本好きとそうではない人に2分される。

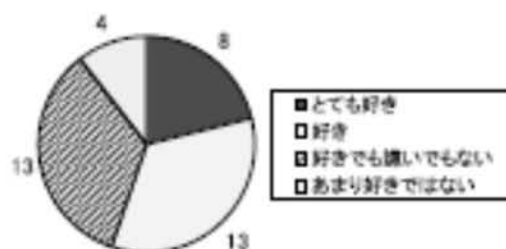


Figure 9 母親の読書好意度

(b) 頻度: 「あまり読まない」が最も多く21人 (55.3%)だった。次いで、「わりと読む」「とてもよく読む」がそれぞれ5人 (13.2%)、「まったく読まない」4人 (10.5%)、「よく読む」3人 (7.9%)と続いた。「あまり・まったく読まない」が26人 (68.4%)と7割近い。母親の読書活動は全般的に活発ではないことが指摘される。

⑦まとめ 本研究の母親が促される5歳児の家庭での絵本体験の特徴は、以下のようにまとめられる。

絵本好きの子どもが多く、家庭に30冊以上の絵本を持っている。読む絵本の種類は、昔話や幼稚園から月決めて持ち帰る絵本 (昔話) が多いが、クイズ絵本なども読み、種類が広がっている。週に2、3回以上は、自分から頼んだり、習慣として就寝前に布団に入って、主に母親から読んでもらっている。

母親は、絵本の文章を大切にしながら、劇仕立てにしたり、会話をしたり、工夫しながら読んでいる。子どもの方は、そうした母親の読みをじっと静かに聞き、絵本の筋の展開を楽しみながら、質問したり、感想を言うなど、言語的に活発に場面に参加している。

また、週に2、3回以上は、15分程度、子どもがひとりで絵本を読む習慣もある。

入園後は、幼稚園の影響を受けて、絵本がより好きになったものの、読み聞かせの頻度・時間は減少している。お気に入りの絵本も、文字の多い物語絵本への移行が見られる。

一方、母親自身の読書好意度は高くはなく、好きな人とそうではない人に2分される。読書の頻度も高くはない。

以上、全体的な特徴をまとめた。以下では、要因ごとの分析結果をみていく。なお群差の分析では、差が見られた項目のみを記す。

## 2. 3. 2. 絵本の好意度による比較

「とても好き」22人、「好き」15人、「好きでも嫌いでもない」1人であったため、「とても好き」と「好き」の2群 (計37人) に分けて比較を行った。



①読み聞かせ行動 T検定の結果、「頻度」において「とても好き」の方が有意に平均値が高かった ( $t(35)=2.40, p<.05$ )。「読み手」では「とても好き」の方だけに「祖母」が含まれた(「読む」8人、「一番よく読む」2人;  $\chi^2(2)=9.34, p<.01$ )。

「時間帯」では、「好き」の方が「夕食後」に読む人が多い傾向にあった(とても好き0人0.0%、好き2人13.3%;  $\chi^2(1)=3.10, p<.10$ )。

「きっかけ」では、いずれも「子どもに頼まれて」が最も多かった(とても好き11人52.4%、好き13人86.7%)。しかし「とても好き」では「習慣」が8人(38.1%)いたのに対し、「好き」では2人(13.3%)しかいなかった。

③読み聞かせ中の反応 「母親の読み方」に有意差が見られ、「とても好き」の方が「生活経験との関連づけ」( $t(35)=2.08, p<.05$ )と「説明を加える」( $t(347)=2.06, p<.05$ )が有意に多かった。

⑤入園後の変化 「お気に入りの絵本の変化」に有意差が見られた。「とても好き」の方が「変わった」と捉える母親が多かった(とても好き18人81.8%、好き7人46.7%;  $\chi^2(1)=5.03, p<.05$ )。

以上の結果から、「とても好き」と母親が子どもの好意度をより高く認識している群の方が、祖母も読み手となって、読み聞かせが習慣化し、定着しており、読み聞かせの頻度が高くなっていた。また、読み聞かせ中、母親は絵本の内容を子どもの生活経験に関連づけたり、説明を加えるといった言語的なかわりを多くしており、子どものお気に入りの絵本の変化についても敏感に把握していることが示された。

### 2. 3. 3. 読み聞かせ頻度による比較

高: 7人(18.4%) (「毎日」2人、「ほぼ毎日」5人)、中: 13人(34.2%) (「週2、3回」13人)、低: 18人(47.4%) (「週1回」12人、「したことはある」6人)の3群に分け、比較を行った。以下、有意差が見られた項目の結果のみを示す。

①読み聞かせ行動 「読み手」において高群で「祖母」が「読む」人が多い傾向にあった(低: 1人5.6%、中: 3人23.1%、高: 4人57.13%、 $\chi^2(4)=8.43, p<.10$ )。

「きっかけ」では高群で「習慣」が多くなっていた(低: 1人5.9%、中: 3人23.1%、高: 6人85.7%、 $\chi^2(6)=17.82, p<.01$ )。逆に「時間帯」では、高群が「帰宅後日中」読む人が全くいなかった(低: 8人44.4%、中: 7人53.8%、高: 0人0.0%、 $\chi^2(2)=5.88, p<.10$ )。

②絵本 「子どもの絵本好意度」( $F(2,35)=4.47, p<.05$ )で有意差が見られた。Tukey法による多重比較を行った結果、低群よりも高群で評定が高かった。

「絵本の種類」でも差が見られ、低群で「月刊雑誌」(「読む」低: 9人50.0%、中: 0人0.0%、高: 1人14.3%、 $\chi^2(2)=10.37, p<.01$ )と「園の月決め絵本」(低: 16人88.9%、中: 7人53.8%、高: 3人42.9%、 $\chi^2(2)$

$=6.89, p<.05$ )を読む人が有意に多かった。一方、中群では「折り紙」(低: 5人27.8%、中: 9人69.2%、高: 1人14.3%、 $\chi^2(2)=7.71, p<.05$ )を読む人が有意に多く、「昔話」(低: 12人66.7%、中: 13人100.0%、高: 5人71.4%、 $\chi^2(2)=5.34, p<.10$ )も多い傾向にあった。高群では「図鑑」(「読む」低: 6人33.3%、中: 7人53.8%、高: 0人0.0%、 $\chi^2(2)=5.87, p<.10$ )は全員が読んでおらず、他の群に比べて少ない傾向にあった。

③読み聞かせ中の反応 「母親の読み方」の「身振り・手振り」( $F(2,35)=3.59, p<.05$ )、「何度でも読む」( $F(2,35)=4.44, p<.05$ )の2項目で有意差が見られた。多重比較の結果、いずれも低群よりも中群の方が評定が高かった。

⑤入園後の変化: 「読み聞かせの頻度・時間の変化」で、高群が「減少」が少ない傾向にあった(低: 12人70.6%、中: 6人46.2%、高: 1人14.3%、 $\chi^2(2)=7.96, p<.10$ )。また、「お気に入りの絵本の変化」で「変わった」が高群で多い傾向にあった(低: 10人55.6%、中: 9人69.2%、高: 7人100.0%、 $\chi^2(2)=4.61, p\leq.10$ )。

以上の結果から、読み聞かせ頻度が高い方が子どもの絵本好意度が高いこと、頻度が低い方が母親が身振り・手振りで活発に絵本を読んだり、子どもの要望に応じて何度・何冊でも絵本を読むことが少なく、子どものお気に入りの絵本の変化への気付きも少ない傾向にあることが示された。また、家庭で読む絵本を見ると、低群の方が月刊誌や園からの持ち帰りの絵本など、定期的に入手する絵本を読む人が多かった。一方、高群では図鑑を読む人が全くいないなど、他群よりも絵本の種類が限定されているようだった。

### 2. 3. 4. 保育年数による比較

2年: 19人(男児10人・女児9人)と3年: 19人(男児10人・女児9人)の2群で、比較を行った。

①読み聞かせ行動 「時間帯」で3年保育の方が「帰宅後日中」に読む人が多い傾向が見られた(2年: 5人26.3%、3年: 10人52.6%;  $\chi^2(1)=2.75, p<.10$ )。

②絵本 「図書館の利用頻度」( $t(36)=2.05, p<.05$ )が3年保育の方が有意に高くなっていた。

③読み聞かせ中の行動 「母親の読み方」において、「忠実に読む」( $t(36)=1.72, p<.10$ )が2年保育の方が多い傾向が見られた。「子どもの反応」では、「同じ絵本を読んでほしいが」( $t(36)=1.70, p<.10$ )が2年保育で多い傾向が見られた。

④ひとり読み 「頻度」( $t(31.0)=2.34, p<.05$ )に有意差が見られ、3年保育の方が高くなっていた。

⑤入園後の変化 「お気に入りの絵本の変化」で「変わった」が3年保育で多かった(2年: 10人52.6%、3年: 16人84.2%;  $\chi^2(1)=4.39, p<.05$ )。また「読み聞かせの頻度・時間の変化」も3年保育で「減少」が多かった(2年: 4人22.2%、3年: 15人78.9%;  $\chi^2(2)=12.80, p<.01$ )。



3年保育の母親の方が、帰宅後に読み聞かせを行ったり、図書館の利用頻度が高いなど、絵本と子どもをつなぐかわりが多いことが示された。この結果を受けてか、子どもも3年保育の方が、自分から本とかかわり、ひとりで本を読むことが多かった。

入園後の変化は、3年保育の方が多くなっていたが、変化を問う場合、3年保育児は3歳入園時との比較、2年保育児の場合は4歳入園時との比較になる。1年前の4歳に比べ、2年前の3歳と比較する方が、変化をはっきりと認識しやすいと考えられる。

### 2. 3. 5. 母親の読書行動による比較

(1) 好意度 高：21人 (55.3%) (「とても好き」8人・「好き」13人)、低：17人 (47.8%) (「好きでも嫌いでもない」13人・「あまり好きではない」3人) の2群に分けた。

②絵本 「子どもの絵本好意度」 ( $t(36)=2.82, p<.01$ ) に有意差が見られ、高群の方が高かった。「絵本の種類」でも差が見られ、高群の方が「折り紙」(低：3人17.6%、高：12人57.1%； $\chi^2(1)=6.13, p<.05$ ) を読む人が多かった。

④ひとり読み 「頻度」 ( $t(36)=3.50, p\leq.001$ ) に有意差が見られ、高群の方が高くなっていた。

(2) 頻度 高：13人 (34.2%) (「とてもよく読む」5人・「よく読む」3人・「わりと読む」5人)、低：25人 (65.8%) (「まったく読まない」4人・「あまり読まない」21人) の2群による比較を行った。

①読み聞かせ行動 「実施時間」 ( $t(36)=1.67, p<.05$ ) に有意差が見られ、高群の方が時間が長かった。

「時間帯」でも差の傾向が見られ、低群の方が「休日」に読む人が多い傾向にあった(低：5人20.0%、高：0人0.0%； $\chi^2(1)=2.99, p<.10$ )。

③読み聞かせ中の行動 「母親の読み方」で、高群の方が「同じ本を繰り返し読む」 ( $t(36)=1.71, p<.10$ ) ことが多い傾向が見られた。

以上、母親の読書好意度が高い方が、子どもの絵本好意度も高く、子どもが1人で絵本を読む頻度も高くなっていた。また、母親の読書頻度が高い方が、読み聞かせを行う時間が長く、同じ絵本を繰り返し読むことも多い傾向にあった。

### 2. 3. 6. 比較のまとめ

子どもの絵本好意度や読み聞かせの頻度が高い方が、読み聞かせが習慣として生活の中に定着し、母親が子どもの絵本の好みの変化を敏感に把握していた。

保育年数の比較では、3年保育の母親の方が積極的に絵本と子どもをつなぐかわりを行っていることがうかがえ、子どもも自分で絵本を読むことが多かった。

母親の読書行動は読み聞かせ行動や、子どもの絵本好意度、ひとり読みと関連し、母親の好意度が高い方が子どもの絵本好意度も高いと捉えており、子どもが自分で絵本を読む頻度も高かった。また、母親の読書

頻度が高い方が、絵本を読む時間も長かった。

## 3. 研究2：3歳、4歳、5歳時の比較

### 3. 1. 目的

幼稚園3歳新入園児の3歳から5歳にかけての家庭での絵本体験の変化を、母親への質問紙調査を通して明らかにする。

### 3. 2. 方法

#### 3. 2. 1. 調査協力者と手続き

2004年度にN県内N幼稚園の3年保育に入園した幼児の母親24人(子どもの性別、男女各12人)。この内、3、4、5歳時に実施した3回の質問紙調査の全てに回答した15人(男8人・女7人)が本研究の対象である(本研究の協力者は、研究1の協力者に含まれる)。5歳時点での母親の平均年齢は、35.9歳(SD3.32、レンジ33~43)。調査時期は、3、4歳児が7月中旬、5歳児が3月中旬である。

#### 3. 2. 2. 質問紙の構成

⑤入園後の変化を除き、研究1と概要は同じ。ただし本研究では、子どもの絵本体験に焦点をあてるため、母親の読書行動は分析から除外した。

#### 3. 2. 3. 分析

質問紙の各項目において、評定値が増減した人数を分析すると同時に、平均値が求められる項目は、3~5歳までの評定の平均値を反復測定による一元配置の分散分析を行った。

### 3. 3. 結果と考察

年齢差が見られた項目のみを以下に示す。

①読み聞かせ行動 分散分析の結果、「読み聞かせ頻度」(Figure 10)に有意差が見られた( $F(2,14)=8.70, p<.01$ )。加齢に伴い、頻度が減少していた。

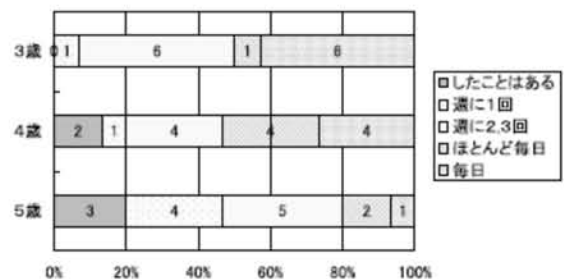


Figure 10 読み聞かせ頻度の変化

「読み手」は、いずれの年齢も母親が主な読み手であった。しかし、母親以外の読み手を見ると「父親」(3歳14人、4歳11人、5歳7人)、「祖母」(3歳9人、4歳7人、5歳6人)と加齢に伴い漸減していた。

「時間帯」(Figure 11)は、いずれの年齢も「就寝

前」が最も多かった。ただし、5歳になると平日読む時間帯のばらつきが小さくなり、特定の時間帯に集約されていくことが分かる。

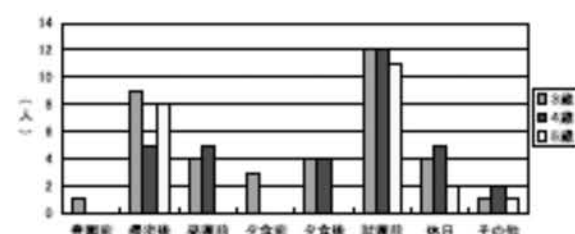


Figure 11 絵本を子どもと一緒に読む時間帯の変化

②絵本「好意度」(Figure12)には、分散分析の結果、有意差は見られなかった。ただし、5歳で入園当初に比べ好意度が変化したかと尋ねると、「より好きになった」が12人(80.0%)いた。最高評定値「とても好き」が3、4歳各10人(66.7%)、5歳11人(73.3%)であることを考えると、評定の天井効果も推察され、今回の質問紙では増加が十分に捉えられなかったとも考えられる。

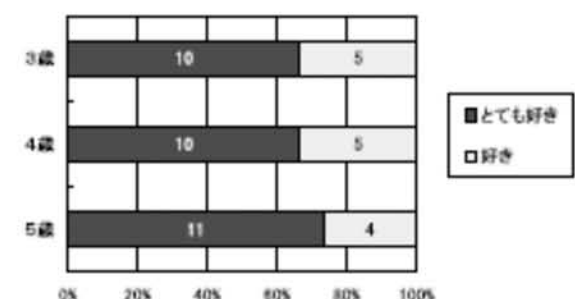


Figure 12 絵本好意度の変化

「絵本数」(Figure13)では、分散分析の結果、有意差が見られた( $F(2,14)=5.69, p<.01$ )。Figure13にあるように、3歳から4歳で急激に増加し、4歳から5歳にかけてさらに全体的に増加している。

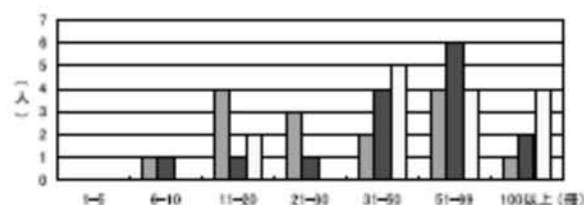


Figure 13 絵本数の変化

「絵本の種類」(Figure14)は、いずれの年齢も「園で毎月購入している月刊絵本」が最も多く、「昔話」が続いた。3歳と5歳を比較すると、3歳では「日常

生活」「アニメ絵本」「おもちゃのような絵本」が多いが、5歳になると「クイズ」「科学」「折り紙」というように、多様な内容の絵本が読まれていた。

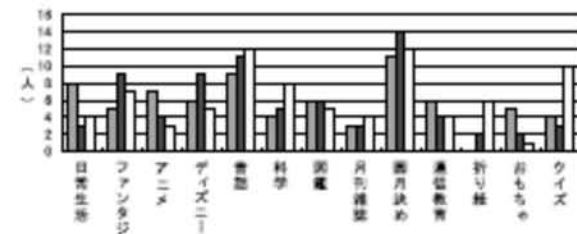


Figure 14 絵本の種類の変化

③読み聞かせ中の反応「母親の読み方」では、「子どもに読ませながら読んでいる」に有意差が見られた(平均(SD): 3歳1.80(0.86)、4歳2.47(1.30)、5歳2.60(1.64)、 $F(2,14)=2.91, p<.10$ )。加齢に伴う増加が指摘される。

「子どもの反応」では、「絵を指さす」(平均(SD): 3.60(1.12)、3.00(0.93)、2.40(1.06)、 $F(2,14)=7.13, p<.01$ )、「読み終わる前に次のページをめくろうとする」(2.07(0.96)、1.73(1.03)、1.47(0.64)、 $F(2,14)=4.09, p<.05$ )で有意差が見られ、「同じ絵本を何度も読んで欲しい」(3.60(1.30)、3.07(1.22)、2.67(1.18)、 $F(2,14)=3.28, p<.10$ )に差の傾向が見られた。いずれも、加齢に伴う減少が見られた。

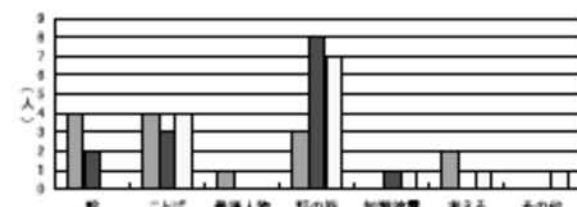


Figure 15 子どもの絵本の楽しみ方の変化

「子どもの絵本の楽しみ方」は、Figure15に示したように、4歳以降「話の筋の展開」に楽しみ方が集約されている。

④ひとり読み「頻度」(Figure16)に有意差が見られ、5歳児で増加していた(平均(SD): 4.60(1.28)、4.67(1.29)、5.47(0.83)、 $F(2,14)=4.37, p<.05$ )。

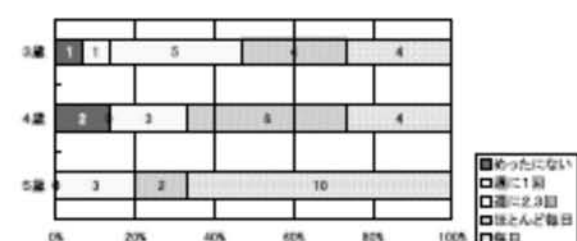


Figure 16 ひとり読みの頻度の変化





Figure 17 ひとり読みの時間の分布

「時間」(Figure 17)にも、有意差が見られ(平均(SD): 2.80(1.08), 2.93(1.03), 3.73(1.10),  $F(2,14) = 6.82, p < .01$ ), 5歳児で増加していた。

⑤まとめ 幼稚園入園から卒園までの3年間の幼児の家庭での絵本体験は、絵本好意度は園での絵本との出会いもあり、増加していると捉える母親が多いが、実際に大人を介して、絵本に触れる量は減少していた。ただし、園から毎月絵本を持ち帰ることもあり、所有する絵本数は年齢とともに増加していた。どの年齢でも、「持ち帰り絵本」は家庭でよく読んでおり、その他、3歳児は「日常生活絵本」を「絵」や「言葉」を楽しみながら読んでいた。4歳児になると「ファンタジー絵本」が多くなり、物語の展開を楽しむことが中心におかれていた。5歳児では「昔話」を中心に物語を楽しみながらも、「クイズ」や「科学絵本」など、読む絵本の種類が多様になっていた。

一方、読んでもらうのではなく、自分で絵本を読む、「ひとり読み」の頻度や時間は、5歳児に向けて増加していた。母親の読み方も子どもが読むことを促すようになり、就学前の段階から「読み聞かせ」から「自分で読むこと」に移行しつつあることが指摘された。

#### 4. 総合的考察

以上の結果をもとに、5歳児の家庭での絵本体験の特徴をまとめ、幼稚園ならではの絵本実践のあり方を提案していく。

##### 4. 1. 5歳児の家庭での絵本体験の特徴

3～5歳の縦断比較から、5歳児では園での絵本との出会いも影響し、絵本の好意度は増加していると母親は捉えているが、絵本を読み聞かせる量は減少していた。逆に子どものひとり読みが増え、早くも5歳で「自分で読む」時期に移行していることが指摘された。

保育年数の比較からは、3年保育の方が、絵本と子どもをつなぐかわりが多いことが示され、3歳児から園での取り組みに接してきた影響が推察された。

母親の読書行動も、子どもの絵本体験に影響を及ぼしており、本好きの母親の方が自分の子がより絵本好

きだと捉えており、子どもも自分で本を読んでいた。

##### 4. 2. 幼稚園ならではの絵本実践のあり方

###### 4. 2. 1. 幼小接続の視点から

今回の「幼稚園教育要領」の領域「言葉」の主な改訂点は、「言葉による伝え合い」(中教審、2008)にある。特に、伝え合いができるようになる前提として相手の話を「聞く」ことが重視されている。

本研究の結果から、5歳児は家庭では絵本を読んでもらう量が減少し、自分で「読む」ことが要求されていた。こうした現状を鑑みれば、保育の場では、より耳から「聞く」読書を進めていく必要があるだろう。「言語活動」の基盤となる「聞く」活動、すなわち保育者が子どもたちに絵本を読む活動を、園では大切にしていきたい。

また5歳児になると、多様なジャンルの絵本が読まれており、「クイズ」や「科学絵本」など、読む絵本の種類が広がっていた。これらの本は、「事実を知る」「調べる」道具としての本である。小学校以降の調べ学習にもつながり、思考力や判断力を育てる本でもある。こうした本の利用を、子どもの興味を捉えながら、園の中でも積極的に広げていきたい。家庭では目を向けることの少ない新たなジャンルの絵本に、保育者や友だちとともに出会い、様々な本の機能を体験できる場をつくりたい。それが、小学校以降の言語活動へとつながると考える。

###### 4. 2. 2. 家庭との連携の視点から

保育者が、子どもと絵本の出会いをつくる大きな役割を担っていることが、本研究から明らかになった。園から持ち帰る絵本が家庭で最もよく読まれる絵本であり、月決めの絵本や毎週の絵本の貸出、園での読み聞かせが、定期的な子どもと絵本の出会いを生み、子どもがより本が好きになったと母親は捉えていた。また、3年保育の方が絵本と子どもをつなぐかわりが多い結果も、園での取り組みの成果と考えられる。

先行研究においても、家庭で絵本と出会う機会の少ない子どもに園が出会いの場を作ったり(横山、2006)、家庭では偏りがちな絵本との出会いを広げる(横山ほか、2007)ことは指摘されてきた。本研究では、そうした行動面への影響に加えて、好意度といった情緒面への影響も示した。

また中教審の答申(2008)では、言語活動の充実のために、「学校における言語環境の整備」が求められている。家庭での子どもの絵本体験を把握した上で、その体験を広げ、深めていく環境の整備が保育の場でも必要である。そのためには、クラス全員で読む絵本や月刊絵本の選書、保育室内の絵本環境、さらには園内文庫の整備や貸出方法の工夫などが、特に重要となってくるだろう。

#### 4. 2. 3. 子育て支援の視点から

本研究の結果から、母親の読書行動が子どもの絵本体験に影響を与えることが明らかになった。子どもだけではなく、母親に本の楽しさを知ってもらうことが、間接的に子どもを本の世界に導くことが指摘できる。

「絵本は人生に三度読むべき」(柳田、2001) だといわれる。人生経験を重ねた上で出会う絵本から、子どもの頃とはまた違う、新たな発見ともいえる深い意味を読みとることも少なくない。直接的な子育てのアドバイスを保育者が語るよりも、絵本を通してそのメッセージを伝えることが、より保護者の心に響く場合もあるだろう。

大人が自分のために絵本を読む(松居、2008)。子育ての気忙しさから、ひととき身を逃れ、ゆったりとした時間の中にわが身を置く。気持ちが落ち着く絵本や、涙が出るほど笑える絵本、じーんと胸に迫る絵本。いろいろな絵本で保護者を迎える。絵本のある空間で、リフレッシュしてもらう。子どもと一緒に、ときには保護者だけで絵本をひらく。そうした子育て支援も、これから可能なのではなかろうか。

幼稚園での絵本体験の影響をふまえての分析 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 16, 49-58.

#### 付 記

- (1) 研究にご協力いただきました保護者の方々に心よりお礼申し上げます。
- (2) 本研究の実施においては、平成15～17年度科学研究費補助金(若手研究(B))(課題番号15730298)の補助を受けた。

#### 引用文献

- 秋田喜代美・黒木秀子(編) 2006 本を通して絆をつむぐ：児童期の暮らしを創る読書環境 北大路書房
- 秋田喜代美・無藤 隆 1996 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討 教育心理学研究, 44, 109-120.
- 中央教育審議会 2008 幼稚園・小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申) 2008年1月17日  
([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/newcs/news/20080117.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/news/20080117.pdf))
- 松居 直 2008 松居直のすすめる50の絵本：大人のための絵本入門 教文館
- 柳田邦男 2001 いのちと共鳴する絵本 河合隼雄・松居 直・柳田邦男 絵本の力(pp.83-116) 岩波書店
- 横山真貴子 2006 3歳児の幼稚園における絵本とのかかわりと家庭での絵本体験との関連：入園直後の1学期間の絵本とのかかわりの分析から 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 15, 91-99.
- 横山真貴子・水野千具沙 2008 保育における集団に対する絵本の読み聞かせの意義：5歳児クラスの読み聞かせ場面の観察から 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 17, 41-51.
- 横山真貴子・上野由利子・木村公美・原田真智子 2007 4歳児の家庭における絵本体験の特徴：幼